大字梅森の歴史に思い馳せる 伊東さん

日進の木・キンモクセイ物語

「宝珠寺の近くのイトウさん宅に大きなキンモクセイがある」

そんな情報を頼りに歩くと、辺りの表札は「伊東」さんや「伊藤」さんばかりで迷ったが、細い道に入ると伊東剛さん（85）宅にたどり着いた。

畑に3メートルを超す高さの木が1本。庭では2本の木を育てていたが、一つは大きく育ち過ぎてしまい数年前に伐採したという。

「親が村長で私も町の仕事をしていましたので、何かの記念でもらって植えたのだろうね。でも歴史はある」と思いを馳せる。

かつて梅森村の集落は南北を流れる郷東川を境に、西側を「郷」、東側を「洞」と称し、古くから住む人たちの間では今でもそう呼び合っている。

歴史をひも解くと、天文2（1533）年、三河国佐々木の城主・松平三蔵信次が梅森に城を築いた。信次は天文7年に桃延坊という道場を今の眺景寺の場所に移し、開基となった。信次の子が天正7（1579）年に宝珠寺を創建したとされ、二つの寺は梅森の歴史を象徴する（日進町誌・郷土史「梅森の歴史」）。

剛さんの父親の故泰司氏は、昭和22年4月から同24年9月まで日進村長を歴任した。農村で生まれ育った剛さんは幼い頃戦争を体験し、町制施行した昭和33年に27歳の若さで梅森区長を任され、後に町会議員も一期務めた。

戦時中の大空襲で梅森には焼夷弾が落とされ、八幡社をはじめ多くの民家が犠牲となった。剛さんは神社の拝殿屋根の修復工事に携わり、「工事の寄付金集めで皆さんに苦労をかけた」と話す。日進村西部国民学校（現・西小学校）で学び、40代の頃、母校で6年間PTA会長を任された。現校舎や体育館の建設計画に奔走し、「運と人脈に助けられた」という。

現在は妻の秀子さん（78）と二人暮らし。歩くのが不自由になったが、カメラや生け花をゆっくり楽しんでいる。剛さんはキンモクセイを見上げながら言う。「知らない間に木が大きくなったように、純農村だった日進もよく変わったと思う。もっとたくましく育ってほしい」（広）

⬆畑のキンモクセイを眺める伊東さん

⬆西小児童から届けられた出前授業の

⬆天白川で楽しみ隊の皆さん

白川へ行って川の生物について子どもたちに話した。後日届けられた児童からのお礼の手紙は、隊員らを大いに喜ばせている。

代表の岡田あつみさんは「子どもにとって日進が故郷になる。その故郷の川で遊んだ思い出作りの手助けをするのが夢」と、たくさんの子どもたちの参加を呼び掛け、事務局長の河村秀根さんは「子どもたちにとってイベントが一過性で終わるのでなく、川と日進の自然に関心と愛着をもってもらうきっかけになれば」と将来を見据えている。

笑顔 そして、未来へ

相野山学区から3人出場 愛知駅伝

⬆左から鈴木さん、青木さん、渡邊君

4区・青木真奈さん（相野山小6年）

結果は自己ベストでしたが、たすきを渡したあと悔しくて泣きました。でも駅伝は楽しかったです。中学でも走ることを続けたいです。

6区・渡邊太智君（相野山小6年）

たすきをもらった時に背中を押されて、やる気が出ました。上り坂は苦しかったけど、みんなの声援がすごく聞こえてがんばれました。

8区・鈴木こなつさん（中部大学第一高1年）

アンカーにしっかりとたすきをつなぐことだけを考えて、夢中で走りました。部活動で走り込んで、もっと強くなって戻ってきます。